

# 離島における学校教育に関する一報告

稲垣吉裕

- I はじめに
- II 調査対象の概要
  - 1) 出羽小学校の概要
  - 2) 伊島小学校、中学校の概要
- III 出羽島における2つの時代の比較
  - 1) 1950年代半ば(昭和30年代)
  - 2) 休校直前・1992(平成4)年
  - 3) 昭和30年代と休校直前を比較して
- IV 1950年代における出羽島の生活の様子
- V 出羽小学校について
  - 1) 出羽小学校の休校措置について
  - 2) 1950年代に勤務されていた先生の話
  - 3) 現在、出羽島から牟岐小学校に子供を通学させているSさんの話
  - 4) 休校当時勤務していた用務員さんの話
- VI 伊島中学校聞き取り結果
  - 1) 学校の統廃合について
  - 2) 小人数教育のメリット・デメリット
  - 3) クラスの特徴
  - 4) PTA
  - 5) クラブ・校外交流
  - 6) 進学
  - 7) 行事
  - 8) その他
- VII 伊島小学校聞き取り結果
  - 1) 小人数教育のメリット・デメリット
  - 2) クラスの特徴
  - 3) PTA
  - 4) クラブ・校外交流
  - 5) 行事
  - 6) その他
- VIII 伊島の調査結果より
- IX 総括

## I はじめに

筆者はこれまで地方都市で育ち、1クラスは40人で1学年は100人以上という環境で学んだ。そのため離島という特殊な地域の学校の様子は分からなかった。そこで今回の離島調査において学校と教育を取り上げることにした。本やテレビなどで言われている離島の教育現場の様子や意見は実際とどのように違うのか、本調査において考えていきたい。

また、小峯(1983)は「教育行政においては、学校の配置、学校の規模、教室の大きさや配置、児童・生徒の交通事故の発生と交通安全教育、そのほか児童・生徒の問題行動や地域環境の問題など、また学校においては、児童・生徒の通学圏の問題、通学のために利用する自転車置き場の設置の問題など、地域に立脚した課題や施設・設備に関する問題が多い」と述べている。離島という地域の中で学校に通う子供たちの様子や地域の生活環境を知るとともに、地域と学校の関係を知ること本調査の目的としたい。

本調査では、出羽小学校について過去2つの時代における学校の状況や子供たちの様子、および出羽島の様子、伊島小学校・中学校については現在の学校と地域の様子を調査する。調査は聞き取りを中心に行った。出羽小学校については、過去に勤務された職員の方に

当時の様子などを聞き、伊島小学校・中学校は、聞き取る項目をあらかじめ設定しそれに沿って聞き取り調査を行った。聞き取った内容をもとに、出羽小学校については現在と過去における学校の状況や子供たちの様子、伊島については現在の学校の状況、子供たちの様子について各項目ごとに述べていく。また、昔の出羽島における生活の様子もあわせて紹介する。

## II 調査対象の概要

### 1) 出羽小学校の概要

出羽小学校は、1882（明治15）年に創立され、尋常高等小学校、国民学校を経て戦後出羽小学校となった。出羽島唯一の小学校として、また地域のコミュニティの中心としてありつづけた。

表1 1982年における出羽小学校卒業者の所在

地区	所在地	人数(人)			地区	所在地	人数(人)			
		全体	13～18歳	19～65歳			全体	13～18歳	19～65歳	
徳島県	徳島市	30		30	中部	岐阜県	1		1	
	鳴門市	1		1		静岡県	5		5	
	阿南市	14		14		合計	15	0	15	
	小松島市	3		3		比率(%)	3	0	3	
	出羽島	132	37	95		関西	大阪府(大阪市を除く)	61		61
	牟岐町(出羽島を除く)	66	1	65			大阪府	30		30
	海部郡(牟岐町を除く)	37		37			兵庫県(神戸市を除く)	21		21
	那賀郡	8		8			神戸市	14		14
	板野郡	10		10			京都府	4		4
	麻植郡	2		2			奈良県	7		7
	名西郡	2		2			和歌山県	11		11
合計	305	38	267	滋賀県	2			2		
比率(%)	56	7	49	合計	150		0	150		
				比率(%)	27		0	27		
関東	東京都	6		6	中国	高知県	1		1	
	千葉県	1		1		香川県	2		2	
	神奈川県	21		21		広島県	1		1	
	埼玉県	3		3		山口県	1		1	
	茨城県	2		2		合計	5	0	5	
	群馬県	1		1		比率(%)	0.9	0	0.9	
	栃木県	2		2		その他	死亡	18		18
	合計	36	0	36			不明	8	1	7
	比率(%)	7	0	7			合計	26	1	25
							比率(%)	5	0.2	4
北陸	長野県	1		1	総合計	540	39	501		
	富山県	1		1						
	愛知県	7		7						

注)1947(昭和22)年～1981(昭和56)年の出羽小学校卒業生を対象とした

戦後、最も多い時期で約 150 名近くいた児童も次第に減少し、1993（平成 5）年に児童数の減少を理由に休校となった（図 1）。

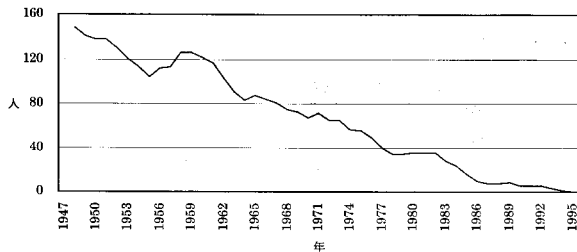


図1 出羽小学校児童数推移

児童数の減少の理由として1つめは、牟岐中学校出羽分校が1959（昭和34）年に廃校となってからは、中学、高校進学と同時に家族で島を離れることが多くなったと聞いたが、1982（昭和57）年時点での卒業者の居住地（表1）をみると、高校生でも島に住んでいる人が多いことがわかる。また、同時期の牟岐町の年少人口（表2）をみると、1950（昭和25）年～1960（昭和35）年にかけて減少していることから、中学校の廃校はあまり影響していないと考えられる。

表2 総人口および年少人口の推移（人）

年度		1947	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980
総人口	全国	78百万	83百万	89百万	93百万	98百万	104百万	112百万	117百万
	徳島県	854,811	878,511	878,109	847,274	815,115	791,111	805,166	825,261
	牟岐町	9,936	10,521	10,568	10,026	9,190	8,181	7,910	7,697
年少人口 0～14歳	徳島県	216,930	319,094	305,341	275,274	219,279	183,878	177,555	175,295
	牟岐町		3,807		3,258	2,465	1,916	1,773	1,608

注)人口は国勢調査による

一方、高校卒業後の住所変更は進学や就職のための住所変更だと考えられ、地域は徳島県と関西地域を中心に北海道、九州、沖縄を除く広範囲に広がっている（図2）。しかし、その後島に帰ってくる若者が減少していったことが児童数減少の2つ目の原因となって

いる。

休校時には希望者がいれば再開する予定だったが、再開の目途は立っていない。理由として財政上の負担が大きいことや、子供と保護者が牟岐小学校への進学を希望したことが挙げられる。現在、教育委員会から出る管理費で、出羽小学校の用務員だった方が1人で校舎の管理をしている。週に二回窓を開けて空気を入れ替え、掃除やグラウンドの草取りなどを行っている。

休校直後、校舎はよく利用されていた。教育委員会と自然の家の主催でキャンプや牟岐の祭りの日に体育館で運動会をやっていたが、2、3年ぐらい前からなくなった。現在は夏に高校などのクラブが何組か合宿にやってくるだけである。ちなみに昨年は5団体、今年は3団体であった。グラウンドは緊急用のヘリポートとして利用しているが、休校中なので完全に整地することが出来ず、地面がむき出しのままになっている。

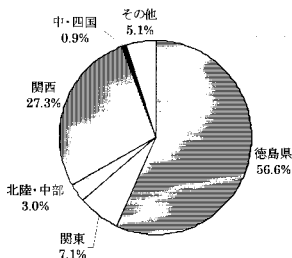


図2 1982年時点での出羽小学校卒業生の居住地域の割合

## 2) 伊島小学校、中学校の概要

伊島小学校は1879（明治12）年に公立伊島小学校単級として設置され、簡易小学校、尋常高等小学校、国民学校を経て戦後那賀郡伊島小学校となる。1958（昭和33）年に阿南市ができると同時に伊島小学校になった。児童数は最大140名ほどいたが、現在は13名となり今後減少を続けていくと予想されている（図3、図5）。

伊島中学校は1947（昭和22）年、那賀郡椿町中学校伊島分校として開校した。小学校同様1958（昭和33）年に阿南市立伊島中学校となる。現在の生徒数は8名で、2011（平成23）年には生徒数が0になると予測されている（図4、図5）。伊島は出羽島と違い本土との距離があるため、生徒数が0にならない限り廃校にはならないが、過去には学校の統廃合の話があった。

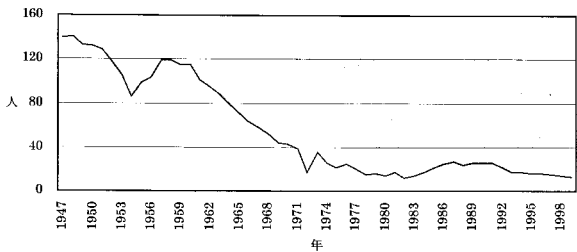


图3 伊島小学校児童数推移

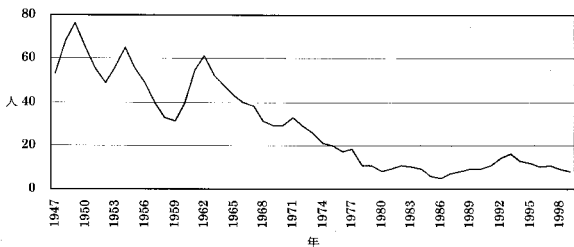


图4 伊島中学校生徒数推移

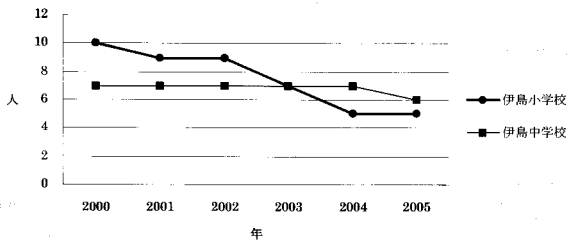


图5 伊島小中学校児童・生徒数予測

### Ⅲ 出羽小学校における2つの時代の比較

ここでは、1950年代と休校直前（1992年）の2つの時代を比較しながら出羽小学校の教育現場の様子、島の子供の学校生活や島の生活の様子を明らかにする。それと共に、時代の違いによる島を含む出羽小学校の様子の変化も明らかにしていく。

#### 1) 1950年代半ば（昭和30年代）

教職員は教員4名、講師1名、用務員1名の6名で、本土から通勤する教職員と島で空家を借りて泊り込んでいる教職員に分かれた。当時は、子供の教育だけでなく教師の教育も熱心に行われ、情性に流されず和やかな中でお互いに研鑽しあった。

離島の学校では、特に校長の力量が問われる。当時の校長は尊敬される存在であり、若い教師は、校長の教師に対する指導を子供の指導の参考にした。若い男の先生は、休み時間はいつも校長室で校長の足の所で寝転がり、本を読んだり新聞を読んだりしていた。また、個々の教師にあわせてその人の可能性を引き出してくれる人物であった。

行事は年に3回で、運動会と遠足、夏冬の作品展があった。以下、各行事を順に紹介していく。

#### ①運動会

運動会は島を挙げての祭りとなり島民が全員参加し、その日は島全体が休みになった。準備は島民全員で行い、年に一度の島のイベントである。

#### ②学芸会

学芸会は昭和30年代半ばから始まった。校長により出し物が変わり、1年目は学習発表会に色をつけたようなもので、学芸会に対する島民の評判は特に良いこともなければ悪いこともなかった。2年目に僻地出身で僻地教育経験の多い校長に変わってから現在の学芸会の形になっていった。教師の抵抗も少しはあったが、お互いに譲り合って次第に出来上がり、島民の評判も良くおひねりを入れる人が増え、物品を購入する資金になっていた。特にお年寄りにも人気があり、孫の様子を見にきていた。

#### ③遠足

遠足は島外に出て行い、2つから3つの学年が一緒に行動し、汽車を利用することが多かった。

島の子供は垢抜けていて、田舎っぽくなかった。自主的で活発でとにかく良い子達で、言うこと、教えることや諭すことを砂が水を吸うように受け入れていった。同姓が多く、教師は呼ぶ時に名前で呼ばなければならず、授業中も名前で呼ぶので親近感があった。

本を読んでもらって話を聞くのを子供たちは喜び、少々程度が高いものでも、やさしく言い換えて話してもらおうと良く理解していた。担任の期間が長くなると、教師は健康状態や家で叱られたこと、うれしいことがあると子供たちの表情から読み取れるようになっていった。また、子供達も同様に教師の健康や気持ちを読み取れるようになっていった。

## 2) 休校直前・1992（平成4）年

教職員は教員5名、用務員1名（1992年は教頭が不在）の6名であった。勤務体系には泊勤（管理職は泊勤でなければならなかった）と通勤（教育委員会との連絡役として書類の運搬などの庶務をこなす。毎年必ず1人おこななければならなかった）があり、泊勤は3年間（教頭は2年間）、通勤は5年間で転勤となった。

授業は、児童数が5人のため複々式学級で行わざるを得なかった。その内訳は6年生2人、5年生2人、3年生1人であった。職員の人数が少ないために少しのことで授業に影響が出ることが多く、特に出張は授業に多大な影響をもたらすため、本当に必要なものしか行かないように教師は気を使っていた。また、子供たちの負担になるようなことはよく考えて行わなければならなかった。

少人数での授業は児童の1人1人に気を配って進めることができ、わかるまで教えることができる。そして小回りがきくので、道德の授業を利用して椎の実拾いに行き炒って皆で食べたり、土器で米を炊いたりと大人数では手間がかかって出来ないことを子供たちに経験させることが出来た。このような利点が少人数での授業にはあった。

その反面、人数があまりにも少ないために授業での話し合いが出来ない。特に国語や道德の授業では討論に発展性がなく、賛成と反対の両極端な2通りの考え方しか出てこず、そのため教師は子供たちの意見に幅を持たせることに努力をしていた。また、3年で教師が転勤していくので、教師の技術によって指導の方法が大きく変わっていく事が多かった。

当時は、仲良しタイムと呼ばれる日替わりの朝の時間と週行事があった。参考程度に記載しておく（表3）。

表3 出羽小学校週行事

曜日	仲良しタイム	内容
月	全校朝会	週目標発表 環境整備の日 全校ゆとり 委員会活動
火	グリーンタイム	週録提出
水	全校体育	クラブ活動（4,5,6年）
木	全校音楽	校内研修（3:00～）
金	読書	
土	健康タイム	学級活動 清潔検査 持ち物検査 週目標決定

行事は主に運動会、遠足、学芸会、修学旅行などがあり、以下に行事別に説明する。

### ①運動会

運動会は7月に室内運動会、10月の第一土曜日に共楽運動会がある。共楽運動会は、昔からの島民運動会として島を挙げてのお祭りであり、準備は島民全員でグラウンドの整備などを行った。

### ②遠足・修学旅行

秋の遠足は島民と一緒に島外へ出てバスで行っていた。また、最終年の修学旅行は休校という事情があるため記念に全校児童5人で奈良、大阪に行った。

### ③校外行事

校外行事として交流学习、牟岐町のマラソン大会、牟岐町の水泳大会や4、5年生による牟岐の宿泊訓練があった。交流学习は、牟岐町にある河内小学校で給食や全体活動や大人数での授業と一緒に受けるものであり、交流学习や宿泊訓練は、中学進学に備えて集団生活になれる為に行われていた。また対外試合では、子供たちはいつになく緊張している様子だった。

### ④卒業式

卒業式は、出羽小学校終了式（休校式）と同時に行なわれた。島民全員が参加できるようにし、島民全員で休校を迎えることになった。しかし、マスコミの取材が多く取材のための卒業式と終了式（休校式）になってしまい、「全員、島民だけで静かに終わりを迎えたかった。今思えば、マスコミの取材をもっと規制していればよかった」と当時の教職員は話していた。

ここで当時の児童の生活にふれておく。委員会活動は、飼育委員会と図書委員会があった。学校での給食はなく昼食は各自が家に帰って食べていたが、牛乳だけはあり、2、3時間目の休憩時間に理科室で飲んでいた（毎週水曜日はコーヒー牛乳の日で子供たちは楽しみにしていた）。時間に余裕があると教師と一緒に釣りに行き、釣った魚は翌日に料理をして食べていた。遊びは竹馬やキャッチボールなどがはやっていたが漫画本を好む子供もいてかなりの数を持っていた。

また、土曜日には塾通いをしている子供もいたが、塾といっても習い事でそろばん、習字程度であった。習い事が本土の子供との接点になり、本土の子供と友達になり、中学に進学したときに寂しい思いをすることはなかった。

休校になるということで、10年後に開ける予定のタイムカプセルをグラウンドに埋めた。中には作文、ワインなどを入れ、開ける時には当時の校長が連絡し全員が集まることになっている。（図6）

### 3) 昭和30年代と休校直前を比較して

2つの時代を比較してみると、児童の変化として特に自発性、積極性という点が挙げられる。昔は様々な課題に対して各自が積極的に取り組み、教師の側からは、これといって押し付けることはなかったが、自分の考えでいろいろなことに挑戦していた。

これに対して休校直前の児童は消極的とは言いきれないが、昔に比べると、積極的ではないと思われる。水泳大会などは頑張り負けず嫌いな面をみせたが、課題などは自分からあまり積極的に取り組むことはなかった。人数が少ないので細かいところまで教師が気を配ることができるが、その反面、子供はいつかは助けてくれるのではないかと甘えることが多かった。その他に、人数が減ったことによる競争意識の低下がある。児童がほとんど横並びの状態、傑出した児童がいなかったために特に頑張ろうということではなかった。

一方、人間性は変化していない。素直で純朴な子供で、離島という環境のため教員が目



まぐるしく変わっていくが、子供たちは新しく赴任してくる教師をあまり抵抗なく受け入れていた。最初は警戒しても拒絶することはなかったが、本当に受け入れられるかは、教師の力量で解決しなければならない問題であった。

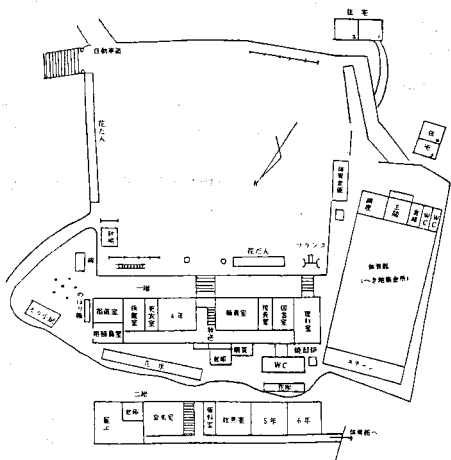


図 6 出羽小学校校舎配置図 (1992年)

出典：平成4年度学校要覧（牟岐町立出羽小学校）

#### IV 1950年代における出羽島の生活の様子

学校での水は山の上に2箇所あったポンプを利用し、1つは校舎横の運動場、もう1つは裏の炊事場にあった。大切に使ったのでめったに不足しなかったが、日照りが続くと水がかれ水筒持参となり、学校のすぐ下にある民家（通称大正丸：大正丸という船を持っていたのでそう呼ばれていた）に水を貰いに通うことになった。

電話は海底ケーブル1本でつながっていたため、ベルの数や鳴り方で数カ所が聞き分けていた。外部へかける時は必ず受話器を取って声がしていないのを確かめてからかけなければならず、たまに人の話に割り込むので注意が必要であった。冗談で「盗聴なんかは朝飯前だった」と話していた。

電気は、簡易発電所が港の口にあり日没後から深夜まで送電があった。1960（昭和35）年の学芸会から、学芸会当日だけライトアップやマイクのために昼間の送電を依頼していた。

当時は遠洋漁業のさかんな頃で、沿岸漁業と神奈川県三崎の方へ出ている人が多く、暮らしは豊かであった。また、春にはテングサ採りがあり島民挙げての作業となっていた。口開けの日には子供たちも磯へ行って作業を手伝い、高学年の児童の中には大人並みの力量を持つ子もいて、たき火で暖を取っては海へ入って海藻を採った。低学年の児童と教職員は邪魔にならないように見学したり、流れてくるのを拾ったりした。修学旅行の旅費のたしにすると行って、6年生全員が頑張って海に入るのを残っている人間が火を燃やして応援していた。

船が三浦岬に入港すると、低学年の児童は親について出迎えに行き、学校は休んでいた。牟岐町の方ではとんぼざーりに神天という子供もいたが、島の子供はみんな垢抜けていた。仕事の帰りに父親が都会のものをお土産に買って帰ってくるが多かったので、都会の風の中に身を置く機会に恵まれ、珍しいものを見聞し、都会の服装をすることができたためである。

#### V 出羽小学校について

ここでは、出羽小学校の休校措置に対す考えを述べると共に、出羽小学校に勤務されていた方と現在島から子供を牟岐小学校に通学させている方、休校当時出羽小学校に職員として勤務されていた方の話を紹介する。

##### 1) 出羽小学校の休校措置について

出羽小学校の休校については、教育委員会から休校の2年前に話があったが、最後に残る5人の児童の保護者による反対や、島民の反対があり1年間待つこととなった。特に高齢者の反対が強く、島民の小学校に対する思い入れがうかがわれる。最終年度の始めに教

育委員会から連絡があり、次年度には児童数が3人になるため今度は休校を受け入れざるをえなかった。

島にとっての小学校は地域のコミュニティーの場所としての役割がある。しかし子供の学習環境としては、あまり好ましくない状況になったといわざるをえない。したがって休校措置はやむをえない。まず、幼稚園時代に作った友達と別れなくてはならず、別れている6年間は子供にとっては大きく、話を聞いた人も「6年間離すのは子供にとってよくない」と話しており、何よりも子供自身が嫌がったという事実がある。

また、島の小学校は子供にとって小人数教育というメリットもあるが、それ以上に大勢の中でもまれ、集団生活の中で社会性を身につけることも大切である。出羽島は本土から近いこともあって通学に時間がかからない。親にとっては事故が心配なようであるが、子供達は楽しくやっているようだ。その点では、出羽小学校の休校措置は、有効な対策の1つであると考えられる。

## 2) 1950年代に勤務されていた先生の話

出羽小学校は、当時から人数が少なすぎた。昔は島で子育てをする人が多かったので、親子二代を教える教師もいたが、赴任した時は島で子育てをしない人が増えている時だった。教員生活を送ってきて一番良いと思う人数は、教師と子供の両方から見て30人ぐらいである。人数が少ないと意見が出にくく考えが偏ってしまい、また授業中の児童への圧迫感が強くなる。そして、複式学級を担任する時は、教師の経験が物を言う事が多く、教員の年齢がまんべんなくないと偏りなく子供に教えることは困難である。

当時は、現在言われているような僻地問題はなく、各自が活発的で自発的であった。土地の言葉を使って指導することもあったが、子供たちは敬語などを自分達でうまく使い分け、教師と子供の関係もうまく行っていた。

出羽小学校に赴任して最初に変だったのは、船になれることで、当時の定期便は船の大きさも小さく、ゆれが現在よりも大きかった。また、残業で最終便に乗り遅れることがたまにあり、島の人が好意で漁船で送ってくれたが、小さい船だったので慣れるまでは必死にしがみついていた。配属された年は職員宿舎がなく2年目に宿舎が出来たが、できるまで空き家を借りて泊まっている先生もいた。

また、PTAは当時から教育熱心であった。若い先生はあまり参加していなかったが、校長達はよく話し合いをし、学校に対して協力的であった。

高校生（主に阿南・日和佐にある高校に通学していた）が増えてくると、船が増便されるようになった。高校卒業後の進路はさまざまであったが、漁業がちょうど衰退し始めた時期と重なり家業を継ぐ子は少なかった。

小学校は地域の文化の象徴みたいなものだが、休校の判断は正しかったと思う。教える側から見ても限界の人数であったように思う。

### 3) 現在、出羽島から牟岐小学校に子供を通学させているSさんの話

Sさんの子供は、小学2年生1人保育園児1人の2人である。Sさんは、出羽島生まれで18才まで島で生活をしてきた。結婚し子供が生まれて、島の自然の中で子供を育てたいという考えから島の実家(空き家)に戻ってきた。子供たちも島での生活を気に入っている。小学校へ進学する時に出羽小学校の復校を要請することを考えたが、子供は幼稚園時代の友人とわかれることを嫌がり、牟岐小学校への通学を望んだために牟岐小学校に入学することとなった。

幼稚園から牟岐の学校に行っているが、やはり通学は心配なため波の高い日は通学をやめている。家にテレビアンテナを付けていないので子供達が友人にビデオを撮ってもらい家族全員で見ることになっている。島で遊ぶことが多く、テレビゲームよりも魚すくいなど外で遊ぶことが多い。

子供達は、水泳が好きで夏の水泳教室にかよっているが、親として子供がやりたいことに対しては、できるだけサポートはしてあげたいと考えている。また、今のところ勉強のことはあまり気にしておらず、今は勉強よりも大切なことを学び、学校という集団生活の中で多くのことを経験して欲しいと考えている。

今後のことはまだ具体的には考えていないが、子供の要望と自分たちの人生を考えると島を出る予定はなく、中学校も出羽島から通う予定である。

### 4) 休校当時勤務していた用務員さんの話

1982(昭和57)年に園児が4人になり島の保育園がなくなってから、牟岐まで送り迎えをするようになった。6年間送り迎えを続けたが、一番心配なのは牟岐で交通事故に遭わないかということだった。当時は以下のように送り迎えをしていた。

午前9:00の船で牟岐まで送り、11:00の船で帰島

午後3:00の船で牟岐にむかい、4:00の船で帰島

現在は、親が園児の送り迎えをしている。

1989(平成元)年から用務員として出羽小学校に勤務することとなった。用務員の仕事は給食がなかったので、教員の昼食作りや給料の受け取り、児童の牛乳はこび、校内の掃除などであった。

現在は校舎の管理をまかされ、週に二回窓を開けて空気を入れ替え、校内の掃除やグラウンドの草取りをしている。しかし、高齢のために年々仕事がつくなくなり、特に草取りが重労働である。昔は行事の時に自治会がやってくれたが、小学校が休校になってからは1人でしなければならない。

体もしんどくなってきたので昨年あたりから今後のことを考えるようになり、教育委員会にはまだ言っていないが、来年あたりにはやめようと思っている。自分の後任は当然決まっておらず、やってくれそうな人はまだ見つからない。休校ということになっているが、また島に学校が戻ってくるとは思っていない。「淋しいが、このまま廃校になるの

を待つしかない」と語っていた（写真1）。



写真1 出羽小学校

撮影日：1999年9月9日

## VI 伊島中学校聞き取り結果

### 1) 学校の統廃合について

総論では反対の声が圧倒的に多い。本土と距離があるため船で時間がかかることに加え、本土での通学時の危険が保護者の反対にあっている。なりよりも島から学校がなくなってしまうことが大きな理由である。

しかし、各論（子供の集団生活の中での社会勉強という点）では賛成の声もある。小人数での教育もよいが、大人数の中で生活し集団生活を経験して社会勉強をしてほしいという意見もある。

## 2) 小人数教育のメリット・デメリット

小人数教育のメリットは、生徒1人1人に配慮して教育しやすい。したがって教師の側は子供に対する共通理解がしやすく、1人1人の様子を把握しやすい。その点で子供達は、各自の能力に応じた教育を受けることができる。また、子供たちとのふれあいが多く、そのために教師と生徒の関係が密になる。

一方、デメリットとして教師の専門性が発揮できない環境にある。特に免許外教科は教えにくく、現在は指導できる教師がそれぞれ教えているが、技能教科は子供の能力を伸ばしきれないという悩みがある。現在は音楽、数学、社会、美術の教員がいない。また、生徒数が少ないので集団生活の中で養われる社会性という面で支障がある。そのため、生徒の視野を広げるためにもできれば大勢の中でもまれる必要がある。この考えは学校、保護者の両方に共通した意見である。

その他に言語環境が乏しいために表現力が貧しく、敬語が旨く使えない。そして、教師にすぐ頼る傾向があり基礎学力が低いなど、現在僻地問題として挙げられている事はほぼあてはまる。

## 3) クラスの特徴

学年を超えて仲が良く、昼休みは小中学生が一緒に遊び、教師も積極的になかに入るようにしている。興味を持つことは普通の中学生と同じだが、釣りなど外で遊ぶ事が多い。

## 4) P T A

保護者のほぼ全員が役員になっているため、保護者の意見が聞きやすく子供の悩みが伝わりやすい。一方、保護者も教育の現状を知る機会が多く、学校に期待する事も多い。他の学校と比べると、保護者の支援を受けやすい環境にあるといえる。しかし、教師の消極的な考えには敏感なので、言動には気をつけなくてはならない。

## 5) クラブ・校外交流

人数、施設が揃わずほとんどの種目は不可能なため、陸上部、卓球部の2つしかなく、生徒の要望はきかないことにしている。

交流・交歓学習(年一回、公的支援がある)として、小松島市立立江中学校で授業を受けている。主に体育、音楽中心になり、相手に特別の時間割を組んでもらっている。

その他に留学体験学習(年5回、同和教育、社会勉強)として阿南市立福井中学校で同和教育の現実を知るための学習をしている。差別をしない人間を育てるとともに、保護者や教師の同和教育も兼ねている。しかし、この学習会は公的な予算が出ないため、保護者に理解を求めて自己負担で行っている。

以上、2つの交流を通して多くの生徒の中に入る事によって社会性を身につけるとともに、高校に進学した後の不安を取り除く事も視野に入れている。この交流で友人を見つけ

る生徒が多く、高校生になってからの友人となっている。また、交流の相手校の理解や地域の理解があるため続けることが出来ている。特に保護者が理解を示し、学校に協力してくれていることが大きい。

## 6) 進学

ほぼ 100 パーセント高校に進学し、主に阿南市にある高校や徳島商業などに進学している。高校進学の他に、過去 10 年間で職業訓練学校に 1 人進学した。高校は島からの通学は不可能なため、中学を卒業すると同時に親元を離れることになり、子供の自立という観点から見れば、他の子供よりも早くなる。

保護者は家業を継いでもらう気はあまりなく、子供もあまり継ぐ気はないようである。しかし、子供は親の仕事に理解を示し誇りを持っている。

## 7) 行事

9 月に行われる伊島祭り（本年度は 12 日～15 日）にあわせて運動会を行っている。全島民が参加し、休日を利用して高校生も帰省し、島は休日となりほとんどの仕事が休みとなる。また、昨年から文化祭を始めた。島民の反応もよく、今後も続けていく予定である。

その他に伊島中学校ではササユリの栽培を行っている。島に自生していた植物であったが、珍しいため乱獲により数が激減し、1951（昭和 26）年に町からの依頼で伊島中学校が管理、栽培することとなった。球根は阿南市にある新野高校に依頼して作ったパイオ球根を使用している。1 年を通して様々な作業があり、生徒数の減少と共に栽培の継続が困難になっているため、現在は地域との共同作業となっている。また、テレビで放送され一時期反響をよんだが、不法採取が増え困っている。

## 8) その他

学校では生徒たちに常に自分を表現できる場があるようにしている。子供に表現の場を与えることは大切であり、そのためコンクール等には子供が乗り気でなくても、先生がつきっきりで指導して出させている。大勢の前で何かをしたという経験を積むことや自分はやり遂げたんだという自信を与えることが目的である。恥は校長がかげばすむことであり、生徒には恥をかかしてはいけない。

小人数のため授業において生徒が常に緊張しているので、たまには息抜きを考えている。また、子供の視野が狭くなりがちなので視野を広げて考えられるように気をつけて授業をしている。一方、赴任してくる教師は若い人が多いことから教師に対する教育も大切にしている。生徒は教師の言動に敏感に反応するため、生徒に対する言動には特に気をつけなければならない。

何をするにも人数が少ないので地域の理解が大切になってくる。その点では、地域の人も子供に何が必要かを理解してくれている。伊島も子供が減ってきている。後 10 年ぐらいで休校になると思われる（写真 2、口絵参照）。

## Ⅶ 伊島小学校聞き取り結果

### 1) 小人数教育のメリット・デメリット

小人数教育のメリットは小人数のため教師が子供たちのことを把握しやすく、そのため子供1人1人を理解することが出来る。小人数なので小回りがきき大人数では出来ない授業も可能である。

一方、デメリットは競争心、社会性が貧しく主体的に物事に取組むことが少ない。その他に中学校でもあった僻地問題がある。

### 2) クラス特徴

よく仕事をし、ボランティアで水曜日の昼と土曜日に島の掃除を行っている。昔から小学校で行ってきた事だが、本人たちはして当たり前と考え、ボランティアという意識はない。島を良くするんだという強い意気込みがある。テレビゲームが好きで多くのソフト持っているようだが、基本的には外で遊ぶことが多い。

### 3) P T A

小中学校両方の会員となっている保護者が多く、教育熱心で父親も仕事の合間をぬって会合や行事に参加してくれる。直接教師に要望を言う親は少なくとも家に行って話を聞くこともあるが、基本的にはP T Aの会合の時に相談される事が多い。

### 4) クラブ・校外交流

週1回球技クラブという名前で球技をしているが、施設がなくあまり出来ないため施設がほしい(出羽小学校の体育館がうらやましい)。

他校との交流は年1回の交歓学習、5年生による宿泊訓練という形での交流の場があり、その他は市の文化祭や音楽祭を通じての交流となる。それ以上の交流は予算の都合上困難であり、またゆとりの教育という点で交流にさく時間がない。しかし、指導要領が改正されたら考えてく。

### 5) 行事

主な行事は運動会、学習発表会や阿南市の行事がある。運動会は、町民祭りとして中学校と合同で行っている。学芸会は時間的余裕がないためにできない(ゆとりの教育にはあわない)。

### 6) その他

児童数が減少してきたため本土の小学校と統廃合し、スクール船での通学の家もあったが、距離が離れているうえに本土での通学に不安が残るために中止になった。また、島民



全員が親しい関係にあるので敬語などを使う機会がほとんどなく、そのため学校では社会的なしつけも行っている。その他に同和教育にも力を入れている（同和教育は徳島県全体の取り組みになっている）。

将来について子供たちは、まだ明確なものは持っておらず、親の仕事に対しては理解を示しているものの家業を継ぐという意識は薄く、保護者のほうもきつい仕事だということがわかっているので無理に継がせるつもりはないようである。多くの保護者は、子供の好きなことをやらせてあげたいと考えている（写真3）。

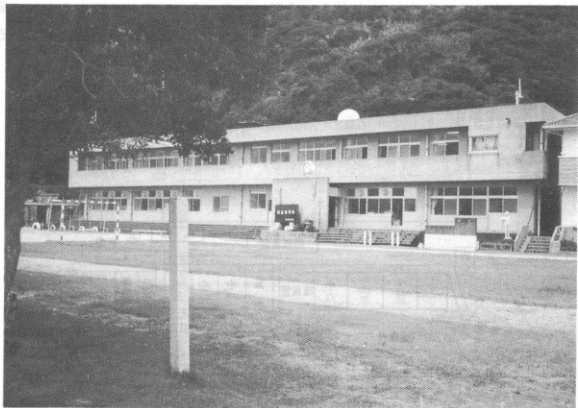


写真3 伊島小学校

撮影日：1999年9月7日

（平1991）徳島県立教育センター

（1999）徳島県立教育センター

## VII 伊島の調査結果より

伊島においても児童、生徒数の減少は切実な問題である。特に中学校においては1学年1人という学年もある。教員の数も少なく授業も本土の学校と比べると不利な点がある。しかし、印象として良い学校のように思えた。校長先生の話を知っていると、離島という不利な条件を何とかしてカバーしようとする熱意が感じられた。小人数という子供たちに気を配ることが出来る環境を、活用して指導にあたりながら、子供達に何が必要なのかを地域と共に考えている。その点で伊島の子供達は、恵まれた環境にあるといえる。

10年後には現在にままで行くと、島の学校に通う子供たちがいなくなる。伊島においても学校がなくなる日は遠くない。休校という形にしるコミュニティの中心として島にありつづけた学校がなくなるといことは、出羽島を見ると、大きな影響を持っているように思う(図7、図8)。

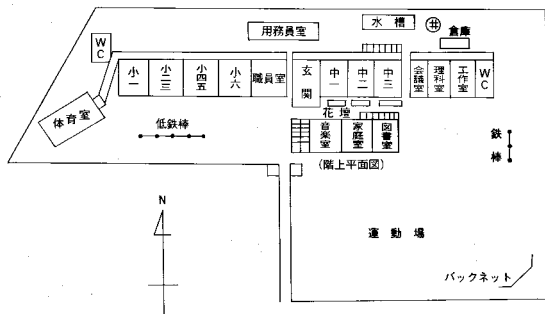
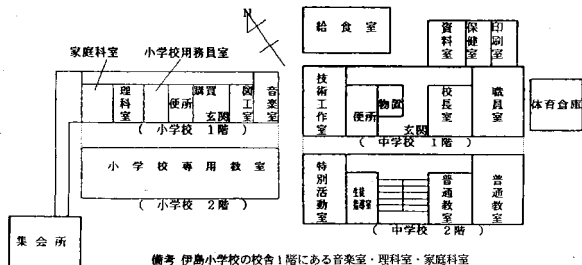


図7 伊島小中学校校舎配置図(1961年)

出典：徳島青年会議所奉仕委員会編(1962, p.21)。



備考 伊島小学校の校舎1階にある音楽室・理科室・家庭科室並びに集会所は、小・中学校兼用となっている。

図8 伊島小中学校校舎配置図（1999年）

出典：平成11年度学校要覧（阿南市立伊島中学校）

## IX 総括

離島という地域における学校教育を行政側ではなく、教育現場を中心に地域の様子とともにみてきた。そのなかで離島の学校の一端を見ることが出来た。

出羽小学校は児童数の減少に伴い、休校でありながら実際は牟岐小学校に統廃合された形になっている。出羽小学校への通学を体験していない子供たちは、現在の状況に不満はなく、保護者も牟岐小学校に通学させることを選択している。一方、地域のコミュニティーの場として存在した小学校がなくなったことにより、コミュニティーの衰退がみられる。小学校の行事を通して育まれていたものが、休校から数年にしてほとんどなくなってしまった。現在も体育館は出羽島の公民館として利用されているが、今後は現在の状態を維持していくことが当面の課題である。

伊島においても児童、生徒数の減少は止まる見込みはなく、休校になる日も遠くない状況である。子供たちにとって不利な状況の中でも、他の学校に劣らない教育をしようと学校と地域が一体になって取り組んでいる。伊島における運動会を兼ねた伊島祭りは、島外で生活している高校生も戻ってきて参加している。その点では地域のコミュニティーの衰退はみられない。

生徒数の減少という問題は、過疎ともからみ難い問題である。離島という状況も解決を遅らせている原因となっている。全国的な過疎現象は、1960（昭和35）年頃から目立

つようになり、「過疎」という言葉も公的に使われ出した。1970（昭和45）年に成立した過疎地域対策臨時措置法は、教育施設に関して小、中学校の統廃合を過疎地域振興の方策としているが、的確な方策であるとは言い切れない。

今日の僻地指定の方法は、学校所在地を基点とする地理的条件に著しくウエイトがおかれ、子供たちをとりまく文化的・経済的要因は重視されていない。したがって、僻地学校・僻地教育を問題としていく場合、へき地指定の有無にとどまらず、文化的や社会的、経済的な実質上のへき地の問題を背負った地域の教育として捉えていくことが必要である。

現在、振興策を含む様々な方法が挙げられているが、調査を通して考えてみるとどれも一長一短であり最良の方法ではない。出羽小学校は休校になってしまったが、2つの地域においていえることは、都市部に比べ学校と地域との関係が強く、教育環境や教育の質をよくするために努力していることである。学校と地域が一致団結している環境がそこには存在し、これが離島という不利な条件を補うもとになっている。

本調査では教育をする側の現状や考えを知ることには重点をおいた。そのため子供たちと話す機会がなく、教育を受ける側の考えや様子を知ることではできなかった。

〔付記〕本稿作成のあたって調査に協力していただいた出羽島の方々、出羽小学校元教員の埴原純子氏、牟岐小学校濱内祥子先生および伊島小学東明正也校長先生、伊島中学新居正秀校長先生に厚く御礼申しあげます。

## 参考文献

- 阿南教育百年史編集委員会編（1987）：『阿南教育百年史』阿南市，512p  
阿南市史編集委員会編（1967）：『阿南市史』阿南市，895p  
伊島小学校編（1955）：『伊島の教育』伊島小学校・中学校，pp33～84  
小峯勇（1983）：『学校経営と地域』大明堂，pp7～8  
中村真樹（1994）：『学校小規模化に関する一提案 京都府公立小学校を事例に－』大阪市立大学 平成6年度卒業論文，96p  
溝口兼三（1972）：『教育のへき地：過疎と過密の中の子ども』日本放送出版協会，215p.  
徳島青年会議所奉仕委員会編（1962）：『社会の谷間・へき地実態調査報告－徳島県阿南市伊島－』徳島青年会議所，pp20～29  
出羽小学校編（1982）：『出羽小学校百年史』出羽小学校，pp96～106  
牟岐町史編集委員会編（1976）：『牟岐町史』牟岐町，1383p  
坂本清泉・内田昇（1983）：『離島・僻地の中学校教師』あゆみ出版，289p.